令和8年度 獨協医科大学大学院看護学研究科博士前期課程入学試験（第1次募集）
【専門科目】 出題意図・解答例／採点基準

問題１

【出題意図】

大学院博士前期課程入学までに必要な下記のレジネスを確認するための設問である。

・（ナイチンゲールがいう「看護」を理解し、）これまでの臨床経験から看護の専門性に対する自分なりの考えを有している
・本当の看護の例示から、その対極にある本当の看護でないことを考察できる
・臨床での経験（現象）を他者へ伝わる表現で言語化できる
・抽象と具体を連結し、思考したことを論理的な記述できる
・誤字脱字なく、文章を記載できる

【解答例】

私はこれまでの看護実践の中で、「本当の看護が行えなかった」と感じた場面がある。それは、術後の疼痛と不安を抱えた高齢患者への対応である。患者は腹部手術後で、夜間に痛みを訴えた。しかし、私は定時の鎮痛薬を患者に与えて、2 時間毎の体位変換を行うのみであった。翌朝、患者は「痛みでほとんど眠れなかった」と語った。

ナイチンゲールは『看護覚え書』の中で、看護とは患者の生命力を消耗させないよう環境を整えることであると述べている。この視点から振り返ると、患者が安楽にいられる療養環境を十分に整えることができていない自分に気づいた。患者の表情や身体の動きを観察する姿勢にも欠けていた。夜勤で多忙だった私は看護業務をこなすことに意識が向き、患者の生命力を支えるという本質的な目的を見失っていたといえる。

本当の看護とするために必要だったのは、業務をこなすのではなく、生命力の回復を支援する重要な情報として患者の訴えに耳を傾ける姿勢をもつことである。そして疼痛の評価を行い、痛みが少しでも軽減されるような療養環境の調整を行い、頓服の鎮痛薬を使用するなどして、患者の身体的・精神的安寧を保つような関わりが必要である。看護師の観察力と判断力、そして人間理解が伴ってこそ、看護は「本当の看護」になると考える。

この経験から、私はどのような状況でも「患者の生命力を支える」ことを看護の中心に据える必要性を学んだ。今後は、目の前の業務に追われる中でも、患者の状態を丁寧に観察し、環境を整え、安寧を保つことを常に意識して実践していきたい。

問題２

【出題意図】

・高度実践看護師に求められる倫理的判断力、患者中心のケア、意思決定支援能力を評価する。

・臨床現場での複雑な価値観調整や多職種連携の経験を通じて、受験者の実践力と論理的思考力を確認する。

【解答例】

私が意思決定支援において困難を感じた事例は、終末期の高齢患者が人工呼吸器装着の是非を判断する場面でした。患者は軽度の認知症を有し、意思表示は可能でしたが、病状理解が不十分であり、家族は延命を強く希望していました。困難の理由は、①患者の自己決定と家族の希望が乖離していたこと、②急性期で時間的猶予が少なく、十分な情報提供と熟慮が難しかったことです。

対応として、私は患者に病状と治療選択肢をわかりやすく説明し、家族にも患者の意思を尊重する重要性を伝えました。しかし、患者は「家族に任せる」と述べ、最終的に家族の希望で人工呼吸器が装着されました。この対応を振り返ると、患者の価値観や人生観を事前に把握する機会が不足していたこと、急性期における意思決定支援の限界を痛感しました。

高度実践看護師として望ましい支援は、①急性期に備えたアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の推進、②患者・家族双方に対する倫理的調整と意思決定プロセスの可視化、③多職種連携による包括的支援です。具体的には、患者が意思を表明できる時期に価値観を確認し、記録・共有する体制を整えること、急性期にはその情報を基に迅速かつ患者中心の判断を支援することが重要です。また、看護師は倫理的ジレンマに対し、エビデンスと倫理原則に基づいた説明を行い、患者の尊厳を守る役割を果たすべきです。